

ヴェネツィア貴族階級の確立とその背景

永井 三 明

【要約】 支配階級としてのヴェネツィア貴族階級が確立したのは、一二九七年のセラータと呼ばれる行為（大議会メンバーを特定の家柄に限定）によるのではない。ヴェネツィア貴族階級が排他的独占的カーストとしてその形態をととのえるのは、十四世紀という長い過程を経たあとで、一四〇三年、中産階級を貴族階級に加えるという提案を拒否したときであった。本稿ではこのような支配階級としての貴族階級確立の背後にある、不況にいたる経済環境の変化、それによってひきおこされたヴェネツィア貴族の意識の変化を求める。

史林 六三巻五号 一九八〇年九月

は し が き

ヴェネツィアの貴族階級は、ヴェネツィア共和国の歴史の核心である。ガスパーロ・コンタリーニ Gasparo Contarini^①、ドナート・ジャンノッティ Donato Giannotti^② にとって、ヴェネツィアの貴族制度は、大きな興味対象であった。十三世紀末から、十七世紀中葉のトルコとの熾烈な戦争にいたるまで、ヴェネツィアの貴族階級は、一貫して、明確な社会階級として独占的排他的特権を行使し、自らの権力がより下級の階層に移ることを阻止したのであった。とはいっても、支配階級としてのヴェネツィア貴族階級の性格は、その建国以来一七九七年の滅亡にいたるまで一貫していたというわけではなかった。蛮族の侵入をのがれた人びとがヴェネツィアに定住して以来、約八世紀の間は、恒久的で明確な貴族階級の形態は定着していなかった。ヴェネツィアに統領 Doge が出現する以前には、ヴェネツィア諸島を支配した部族の幹部

Tribuni が事実上の貴族階級を形成した。しかしそれらは榮譽ある家柄を示す純粋な敬称にすぎなかった。尤も、それぞれの時代に優位を示すグループは存在したのであるが、十三世紀の末までは、たとえドージェであれ他の高官であれ、けっして排他的特権を有していたわけではなく、支配階級としての貴族階級を明確に形成したのではなかった。彼らには在職中に特権がみとめられただけであった。^③ヴェネツィアでは、個々の貴族の家柄はあったが、それらが集団として力をふるう支配階級としての貴族階級は存在しなかったのである。

しかしながら次章でのべるように、十三世紀末、一連の法律が二つの原則をうちたてて貴族階級の形成をうながし、漸次それに手を加えていくことになる。すなわち現存する政治階級（その時点での大議会のメンバー）がヴェネツィアにおける政治権力をそれ以後独占すること、そしてこの独占は世襲されるということであった。すなわち貴族身分が法的に確定し、一三八一年や十七世紀、十八世紀は別として、非貴族出身者がこの階級に加わることを阻止することによって、貴族階級の純潔をまもったのである。

いずれの国家にあっても、貴族階級は排他的で閉鎖的なものではあるが、ヴェネツィア貴族階級が新加入者を締め出すことの徹底性はその例を見ない。今ひとつの特徴は、他の国家では貴族階級の成立は歴史の中における自然発生の要素が強いのであるが、ヴェネツィアにおいては、上述のように、明確に人為的に形成されたものである。以上二つのヴェネツィア貴族の固定化された傾向は、ヴェネツィア史の神聖な慣習として永続したのであった。ヴェネツィア史における政治的安定の傾向と文化における保守性は、明かに閉鎖的貴族階級と密接な関係があったにちがいないであろう。

しかし、ヴェネツィア貴族制度が、なんの緊張も矛盾もなく安定して永続したのかという点になると問題は別である。それはヴェネツィア政治史の進行や経済活動の帰趨、および社会のしくみに微妙な影響を与えながら自己展開を示したのであった。したがってヴェネツィア貴族階級の問題は、ヴェネツィア史を考えていくうえで避けて通れない課題なのである。

本稿では主として貴族階級形成に焦点をあわせ、その際の貴族階級の意識との関連をうきばりにする。

① ガスパーロ・コンタリーニについては、拙稿『十六世紀ヴェネツィア』1975, Ch. IX.

『史における政治意識の覚醒』(『史林』六十一巻六号) 参照。 ② J. C. Davis, *The Decline of the Venetian Nobility as a Ruling*

③ cf. J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment, Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, Princeton.

一 いわゆるセラータについて

千三百年代のフィレンツェをはじめとするイタリア諸都市における政治史の共通の図式は、貴族身分におどり出る者の間の闘争であった。そこでは旧来の貴族 *Magnati* と新興の大市民 *Popolo Grasso* との間の恒常的な争いに彩られていた。ところがヴェネツィアの歴史は、これとは異った様相を示すものであった。ヴェネツィアでは貴族階級は固定しており、新興の成り上り *Gente Nuova* が新たにこれに加わることはなかった。あるいは地方貴族と都市の商人との闘争もなかった。この時代のヴェネツィアは、経済的にも、対外的にも困難な問題が山積していたのであるが、他の都市のように、誰が支配階層のメンバーであるかという問題について頭を痛めるようなことはなかったのである。では、ヴェネツィアをして、他の都市とは異った道を歩ましめることを可能にした分岐点は何であったらうか。

一般に、ヴェネツィア史における転換点としてみとめられているものは、一二九七年のセラータ *Serrata* とよばれる大議會 *Magior Consiglio* のメンバーの法的な基礎の確立、やがて東地中海の覇権につながる一三七八〇一八一年のジェノヴァとの死闘における勝利、十五世紀はじめに始ったイタリア本土 *Terrafirma* への進出^①、十五世紀末のインド航路発見につづいてヴェネツィア共和国の存立を脅かした一五〇九年のカンブレ同盟戦争、十七世紀当初の四半世紀に始まるヴェネツィアの経済的下降などがこれである。本章でとりあつかうのは、第一番目のセラータの問題である。

ヴェネツィアの貴族政体は、その貴族階級がドーージェの権力を抑制する一方、他面ではコモーネの人民集会 *Concilio*、

Arengo を排除した成果にもとづくものとされている (人民集会は一四二三年に完全に廃止)^②。十二世紀中ごろから、ドージエの権力を抑制するものとして、有識者の会議 *Consilium Sapientum* がおかれ、それが *Maius Consilium* と *Minor Consilium* へと発展を示す。^④

もともと *Maius Consilium* はリアルトの貴族が支配していたが (明かに平民も加わっていた)、それが拡大されて「大議會」*Magior Consilio* として全ヴェネツィア貴族の議會となり、最高機関としての人民集会にとつて代ることになった。一二九七年と一三〇七年のセラータ *Serrata* により、大議會の議員資格は特定の家柄に限定されることになる。一三八一年、三十家族が新しく議員資格を例外的にみとめられたけれども、それ以後二六五年にわたつて、大議會への新加入は閉ざされたままであった。^⑥ 指定された家柄のすべての成年男子 (二五歳以上) のメンバーは、非嫡出や合法的に廃嫡されたものは除いて、大議會に議席をもち貴族と規定された。したがつて貴族であることと大議會に議席をもつことは同じであった。

時代とともに貴族人口は増減し、それにつれて大議會のメンバーの実数はいちじるしく変動するが、いちばん多かった十六世紀はじめには二六〇〇名をこえていた。^⑦ いうまでもなく大議會は最高の集会であつて、その主要な機能は、ドージエ以下の役職者を選挙によつて選出することであつた。

いっぽう *Minor Consiglio* または小委員会は、内部的な核の働きをなすものである。それらはドージエとその評議員とからなる。彼らが最高の司法官である四十人会 *Quarantia* と共に座るとき *ニョリーア Signoria* となり、その *シニョリーア* が有職者 (賢人) *Savi* とよばれる行政官と共に座れば *コレツィョ Collegio* とよばれた。

いっぽう元老院 *Senato*, *Pregradi* とは *コレツィョ* を拡大したものである。これは十三世紀において、ドージエに助言するための評議員の集団に源を発する。一方からいえば、元老院は、各種の行政官、司法官とともに *コレツィョ* のメンバーから構成されるもので、十六世紀には二百から三百のメンバーをもつていた。

コレッジョは大使の受け入れ、教会関係などを任務にもっていたが審議権はなく、立法権は元老院に所屬していた。以上のべた各機関の職掌分担にはあいまいさが残るが、このために、もともと国家の安全にかかわる緊急で秘密の事項を処理するために十四世紀に設置された十人会 *Consiglio dei Dieci* が十六世紀に権力を握るようになったことは有名である。

さて、セラータ *la Serrata del Consiglio* についての様子。それはいうまでもなく *serrare* 「閉す」から来ている。しかし大議會を閉鎖するというのではなく、むしろ「(メンバーを)凍結する」「新しい入会を許さない」という意味内容をもっている。一二九七年二月に通過した法律によれば、過去四年間大議會のメンバーであった人は、来る同年九月二九日に議員に応募することができた^⑪。そして四十人会の四十票のうち十二票をうれば大議會の議員となった。この法律は祖先については何も規定していないが、終身の議員としてみとめられると、父から息子たちへと継承されることになった。しかも一二九七年二月の法律は、過去四年間にたまたまメンバーでなかった人びとのために、翌年の議會を用意したのである^⑫。

ところが、なぜこの時期に大議會を固定しなければならなかったか、またこの行為がなにをもたらしただのかという解釈については、必ずしも明確な一致がみられない。一般には、いたって漠然と、このセラータという現象は人民にたいする貴族寡頭政の勝利とみなされ、ヴェネツィアにおける人民主権である人民集会にたいする貴族政大議會の優越をもたらしたと考えられる。そこには貴族と人民(平民)との間の階級闘争という一般的図式がよこたわっている。以下この図式にたいする批判をのべよう。

「人すべて商人である。Tutta gente sono mercanti.」とヴェネツィアを旅行したフランチェスコ派巡礼ニコロ・ダ・ボッジボンシは一三四六年春にのべている^⑬。商業が優越していたここでは、商人ギルドは存在する必要はなかったし、ヴェネツィア当局も、国家が商業に依存していることをくりかえしのべている。ドージェさえも商業活動に従事した^⑭。しかも一三〇〇年をさむ数十年間にヨーロッパ、とくにヴェネツィア、ジェノヴァの商業活動は頂点に達していた。すな

わちヴェネツィアにとって、ジェノヴァとの戦争は別として、その商業活動は最盛期に達していた。たとえば國營の造船所 Arsenal は一〇〇四年に設立されたのであるが、一三〇三年には、その面積はほとんど三倍になっていたし、港灣施設の拡張も一三二五年になるまで活発につづけられたのである。^⑥

この時代は、ジブラルタルを経由してインドに達することを計画したジェノヴァ人ヴィヴァルディ兄弟 Vivaldi ヤーロコ・ポーロの時代であった。あるいはザッカリア Zaccaria やギゾルフィ Ghisolfi の時代であった。(彼らは多くのばあい複数なのである。彼らの事業は二人またはそれ以上の兄弟や親類が協力しておこなわれたからである。) 一三〇〇年ころ存在していたこれらの商人にとっての商業活動の場は、商業活動が日常化した地中海を中心とする地帯と、危険で冒険をとまなうその外部の地帯とに分かれていた。後者の地帯では無限の危険と巨額の費用を要したので、コンメンダ Commenda あるいはコッレガンツァ Colleganza とよばれる協同経営がとられた。^⑦ ひとつの冒険事業が計画されると、投資家と探検家とが募られる。投資家は投下資本を失う危険があるために、成功のばあいは利益の四分の三を獲得する条件となっていた。他方、探検家は身体と旅行の苦勞を提供して、残りの四分の一の利益が約束された。^⑧ この企業形態は未知への商業旅行に最適のものであったが、商業活動の日常化と定住商人の出現とともに、この協同経営の形態は減少していく。この協同経営形態は地中海貿易にも適用され、新人登場の機会を与えた。しかし十三世紀末には、アジアのような危険と利益の多い地域への進出には、新人登場の機会はめぐまれません、それらを独占したのはジェノヴァやヴェネツィアの貴族の家族であった。このようにアジアにおける貿易を独占したのが貴族であったというのは、偶然ではなかった。なぜならば、そのためには、冒險精神のみが要求されるだけでなく、莫大な資産と社会的信用、緊密な親戚關係が要求されたからである。一三三九年、デリーに赴いたヴェネツィア貴族ジョヴァンニ・ロレダン Giovanni Lorendan は大金をその母から得て資金にしたのであり、同じ年にフランチェスキノ・ロレダン Franceschino Loredan は妻の持参金をもって元へ赴いたのであった。

平民が遠隔の地に赴いたことも皆無ではなかった。彼らには経済的背景に乏しく、家族の結びつきの厚みにもかけていたのである。どちらかといえば、ジェノヴァとヴェネツィアの平民は、貴族がなおざりにしていたヨーロッパの辺境との貿易に従事した。ハンガリーではヴェネツィアの平民が十三世紀中ごろから活躍していたし、ポーランドで活躍したヴェネツィア人も平民であった。彼らは代理人として辺境に定住して貿易をしたが、協同経営による契約における旅行パーティーよりも、はるかに少いわけ前しか受けとることができなかった。代理人はことごとくに雇い主のこまごました指図に従わなければならなかった^⑮。そして彼らの取得分は四パーセントか五パーセントに限られていた。しかもその代理人も親類から雇われることが多かったので、ふつうの平民や外国人が代理人となることは容易ではなかった。代理人となったところで協同経営者へと上昇することはむずかしかった。というのは割のよい仕事は全部親類縁者にまわされたからである。

以上が一三〇〇年ごろの商業のしくみの素描である。新しい商業活動の主導権をにぎったのは、以前から積極的に協同経営の契約によって利益をあげてきた旧い貴族であった。したがって一三〇〇年ごろには、旧来からの実力者と、平民とのあいだにへだたりがでてきたことが一般的にみとめられるであろう。しかも、セラータの終った一三二四年の航海条令 *Capitulare Navigantium*^⑯ によって財産の少ない人にはより少いわけまえしか与えられないことになっている。しかも貴族と平民が協同経営事業を組む機会が少くなってきている数字がある。一二四〇—六一年の協同経営事業のうちで貴族が主催したものは五一%にすぎなかったのに、一三〇九—二三年には八一%に上昇する。平民主催の協同経営の事業は、二四〇—六一年の四八・五%より一三〇九—二三年には一八・六%へと減少する^⑰。それだけでなく貴族が主催する事業に参加する平民の割合も、同じ時期に約三分の一に減少している。以上のことは、セラータ成立と時期を同じくして、貴族が海上貿易においてより大きな役割を演ずるようになり、貴族同志で協力しあって平民は排除される傾向にあったことを示すであろう。こうして貴族と平民との間に商業上の分裂だけでなく、政治的社会的な分裂も生じたことが推測されるのである^⑱。

このような状況を前提としながらクラッコ G. Cracco は、セラータの形成について、ひとつの仮定をつくりあげた。彼は十三世紀末には、貿易による利益が少なくなったと判断した。このような状態にたいして、以前から富と権力を確保してきたドージュのピエトロ・グラデニーゴ Pietro Gradenigo を頂点とする上層階級 Magnati; Grandi はこれを乗切ることができた。しかし中産層の貿易業者はこれに対処できなかった。そこで中産層は、官職を保有してその手当を得ようとして政治的要求をもち出したと考えられる。(ヴェネツィアにおける下級職は有給であった。)グラデニーゴ派は一二九七年に、大議會のメンバーシップをこれら不満の中産層に与えることによって、彼らの不満を吸収し、旧来からの支配階級の優位をつづけることに成功した。これがセラータなのである。以上のようなクラッコの仮定は、すでにのべた十三世紀末の社会的危機とあわせて考えると、十分うったえるものがある。

以上のようにクラッコは素朴な階級闘争の図式を批判した。同じようにレーン F. C. Lane も、年代記をとおして以下のように論じた。^④

一二九七年の改革が、大議會から平民を締め出すものであったということは、実のところどの年代記の中にも記載されていない。というよりも、大議會の議員選出の手つづきを変更した一二九七年の法律そのものについて触れられていない。一二八〇年と一三二〇年との間のヴェネツィアの生活を同時代に記述した年代記は存在しないのである。ヴェネツィアは、フィレンツェのジョヴァンニ・ヴィラーニに匹敵する年代記をもたなかった。アンドレア・ダンドロ Andrea Dandolo が一三五〇年ころに書いたと推定される年代記^⑤の中で、大議會の変化について言及されているのであるが、市民にたいして大議會を閉鎖したとのべておらず、当時のドージュであるピエトロ・グラデニーゴについて「このドージュはその委員会とともに、若干の平民たちが大議會に入ることが許されるということをも命じた」と記述している。またこれとほぼ同時代のジュステイニアーニ Giustiniani の年代記も、大議會の閉鎖あるいは平民の締め出しについてのべるのではなく新加入の事実を次のように明示する。「一三〇三年一月、このドージュ(グラデニーゴ)のとき、ドージュ閣下ならび他の貴

族は、アッコンとその周辺から逃れてヴェネツィアに住むためにやってきた多くのシリア人の子孫と、すでにのべたジェノヴァとの戦争で勇敢にふるまった多くのヴェネツィアの平民とを、ヴェネツィア大議会の議員にすることに決定した^⑤と。

以上からして、すくなくとも、貴族と平民との対立というよりは、外国人と平民の一部が新しく参加したという色彩が強いように思われる。セラータ後、ティエポロ Bajamonte Tiepolo の陰謀（一二一〇年）が企てられたが、これらはいうまでもなくセラータに対するなんらかの不満にもついていることにはぼまちがいない。大議会に入りえなかった平民からすれば、たしかに大議会からの締め出しであったであろうが、さきの年代記からもわかるように、大議会は明かに多くの平民を参加させ吸収したのであった。ティエポロの大きかりの陰謀はもちろん複雑な要素がからまっていたことであろうが、すくなくとも新参の外国人や平民がヴェネツィア貴族に成上ったことにたいする、旧来からのヴェネツィア貴族の敵意がある。陰謀事件の原因は、大議会からの平民の締め出しではなくて、むしろ平民の新参加によるものであったといえよう。一二九七年には、大議会の議員数五八九名であったのに対し、一三一四年には一一五〇名に急増している^⑥ことも、大巾な平民の新参加が考えられざるをえないのである。

当時のイタリア各地の政治の動向は、ゲルフとギベリンの抗争と、都市内部のギルドの問題を投影している。ところがヴェネツィアのギルドには明確な特徴が見られる。それらは職人層と小商店主層を代表するものであり、フィレンツェのカリマラ組合のように外国貿易に従事する商人ギルドは存在しなかった。というのは、ヴェネツィアの貿易業者は政府のしっかりした監督下にあったため、彼らは今さら特別の組織を必要としなかったのである。また裁判官や書記の組合、あるいは船員の組合も存在しなかった。しかし造船所の労働者、建築労働者には組合が存在した。しかしより強力であったのは、染色業者、薬種商、仕立職人、鍛冶屋、金細工師、宝石職人などの手工業者の組合であった^⑦。

ヴェネツィアのギルドの今ひとつの特徴は、それが宗教的な相互扶助団体 *Scuola* の形態をとったことであった^⑧。国家

はこのスクオーラを監督し、騒乱防止のために規制を加えるいっぽうで、スクオーラの内部での相互扶助と信仰については自治と自由とをみとめていた。したがってヴェネツィアのギルドは、服従と限定づきの自治の伝統を、以後五百年間にわたって享受することとなる。

ヴェネツィアのギルドが一般に受動的であることを考えれば、一三〇〇年前後の政治情況の中で、ギルドが陰謀に加担して政治情勢を積極的に左右したことはありえない。

ギルドはティエポロの陰謀に主導的な役割を果さなかったが、積極的にドージェ側を支持した平民があった。そのみかえりとして貴族になった彼らは、職人のギルドと結託することなしに目的を達成することができたので、他の都市に見られるような内乱を誘発することがなかった。逆の立場で見ると、旧来からの支配層が進んで有力な平民、協力的な平民に門戸を開いたことが、ヴェネツィアの安定の礎石となったのである。

レーンは、当時のヴェネツィアにおける貴族と平民との間の階級的対立意識が希薄であったことの傍証をかかげている。一二九四―八年のジェノヴァとの戦争において、これを指導したのはヴェネツィアの貴族層だけではなかった。クルツォーラ *Curzola* ^④ で完敗したヴェネツィアの艦隊の指揮をとったのは、故ドージェ、ジョヴァンニ・ダンドロの子息である保守的な人物であったが、その海戦のヴェネツィア側の主役はその名前からも察せられるように、ドメニコ・スキアーヴ ^⑤ Domenico Schiavo とどう平民であった (Schiavo は奴隷の意)。当時のヴェネツィアの緊急事態下でも、ガレー船の船長 *sopracomito* が平民であったという事実は、深刻な階級対立の可能性の少かったことを示すであらう。

以上のべてきたことから、いわゆるセラータは貴族対平民の階級闘争の所産ではなく、またギルドとの関連もほとんどみとめられないことが明白になった。しかし、それで問題が解明されたわけではない。なぜなら、なぜこの時期にわざわざセラータという大変動がもたらされたのかということが説明されないままだからである。

この理由として第一に考えられることは、一二九七年における支配層の中に、大議會を法的に整備しなければならな

った必要性があったということである。それは具体的にはどういうことであろうか。

第一に注目しなければならぬのは、一二九四年から九八年において、ヴェネツィアは宿敵のジェノヴァとの間に第二次の戦争を戦っていたということである。すでにのべたようにクルツォーラでの完敗をはじめ、情況はヴェネツィアに不利であった。内政と貿易と、さらに軍事を指導する主脳陣として、当時の五〇〇名前後の貴族をもってはいかにも手薄であったであろう。

いっぽうジェノヴァは、一二八四年ピサをやぶり、一二九八年ではクルツォーラでヴェネツィアを撃破し、十三、十四世紀はじめには繁栄の絶頂に達したのであった。フィレンツェの有名な年代記者ジョヴァンニ・ヴィルラーニは、ジェノヴァ人をキリスト教徒とイスラム教徒の中で最も富み最も強力であるとのべた。^④ ヴェネツィアはこの怖るべき敵と戦っていたのである。この二つの都市は、「イタリアの二つの炬火」とよばれ、世界の最も重要な商業の中心地であり、ともに広大な植民地を有する強力な共和国という点で共通していた。

しかし両都市の歴史的運命が異っていたように、その政治制度の相違も明確であった。^⑤

ジェノヴァにおいては、新しくその都市に移住してきた者すべてに市民権が賦与された。いっぽうヴェネツィアにおいては、二五年間定住してきた者で、都市の強制公債の割あてを着実に消化してきたことが市民権賦与の条件であった。（尤もこれは一三四八年の黒死病のあとと、ジェノヴァとのキオッジャ戦後の一三八二年には一時的に緩和されている。）^⑥ このような市民権についての政策の相違は、それぞれの植民地での政策に投影していた。たとえばコンスタンティノープルのヴェネツィア人のマルコ・ミノット Marco Minotto なる人物が、次のような不満をもちしていることをききのがすことはできない。^⑦ それによれば、ヴェネツィア出先官憲は、ヴェネツィア支配下の領民であることを主張する人びとにたいして、四代前の先祖にまで遡ってこと細かに調査するのだという。したがってミノットは、ヴェネツィアの領民とみとめられなかった個人がジェノヴァの領民の資格をとろうとして、それがいとも簡単に実現することを歎いているのであ

る。「ジェノヴァ人は、彼らの父親が誰であるかにかかわらず、すべてを受け入れる。たとえ当の人物の出身や財産からしてヴェネツィア人であったとしても。」^⑧彼はさらにいう。「ロマニア Romania^⑨では、われわれはたえず数が減り、ジェノヴァ人は常に増えていく。というのは、彼らの父や祖父がヴェネツィア人としてもっていた特権や権利を彼ら自身が行使できないと、多くのヴェネツィア人のみならずギリシア人までもがジェノヴァ人に変ったからである」と。彼はドージュの善処を要望して、最後に強調している。「その数がたくさんひしめいている連中というのは、少ししかいない人びとよりも恐れられる」^⑩と。そこには数の上でジェノヴァ人におされたヴェネツィア人の危機感が明かに現われている。すなわちジェノヴァとの対比において、ヴェネツィア貴族階級拡大の可能性が存在し、しかもそれによって平民の協力をうることができるという一石二鳥の効果がありえたのである。

しかも重要なことは、このミノットは有力貴族の一員であるということである。このことは、当時のヴェネツィア貴族階級ができるだけ凝縮しようと意識していたのではなく、むしろ逆に、外国人や平民を導入して門戸をひらいたドージュのグラデニーゴのセラータにたいして、貴族が同意する可能性が高かったことを示すであろう。

ここになってはじめて、セラータの真の意味がおぼろげながらうかび上ってくる。セラータがジェノヴァとの死闘を背景として実行されたことは、次の事実を明示するであろう。

第一に、手薄の貴族階級を補充するために、有力で協力的な平民、海外からの亡命者を貴族に加えること、第二に平民に大議會への参加の可能性を残して、平民の国家への献身を期待したということである。そして第三に、彼らの意図は、貴族の人口問題めぐってのジェノヴァを意識した措置であつたにちがいない。セラータをもたらししたのは、(これまで指摘されることはなかったが)、実はジェノヴァとの戦争だったのである。第四に、それまで大議會に加わることは、偶然の要素に左右されて貴族に大きな不安を与えていたが、全員参加と世襲というセラータの改革によって、貴族に安心感を与えたということである。

- ① cf. R. Cessi, *Storia della Repubblica di Venezia*, Milano, 1968, Vol. I, Cap. VI.
- ② O. Logan, *Culture and Society in Venice 1470~1790*, London, 1972, p. 2.
- ③ F. Lane, *Venice, A Maritime Republic*, Baltimore, 1973, p. 91.
- ④ R. Cessi, *op. cit.*, Vol. II, p. 4.
- ⑤ *ibid.*, Vol. I, pp. 148-151.
- ⑥ J. C. Devis, *op. cit.*, p. 16.
- ⑦ S. Romanin, *Storia Documentata di Venezia*, 1974, III ed., III, 300-301.
- ⑧ J. C. Devis, *op. cit.*, p. 18.
- ⑨ Marin Sanuto, *Diarii*, XLV, 569-72. 24423 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 | 101 | 102 | 103 | 104 | 105 | 106 | 107 | 108 | 109 | 110 | 111 | 112 | 113 | 114 | 115 | 116 | 117 | 118 | 119 | 120 | 121 | 122 | 123 | 124 | 125 | 126 | 127 | 128 | 129 | 130 | 131 | 132 | 133 | 134 | 135 | 136 | 137 | 138 | 139 | 140 | 141 | 142 | 143 | 144 | 145 | 146 | 147 | 148 | 149 | 150 | 151 | 152 | 153 | 154 | 155 | 156 | 157 | 158 | 159 | 160 | 161 | 162 | 163 | 164 | 165 | 166 | 167 | 168 | 169 | 170 | 171 | 172 | 173 | 174 | 175 | 176 | 177 | 178 | 179 | 180 | 181 | 182 | 183 | 184 | 185 | 186 | 187 | 188 | 189 | 190 | 191 | 192 | 193 | 194 | 195 | 196 | 197 | 198 | 199 | 200 | 201 | 202 | 203 | 204 | 205 | 206 | 207 | 208 | 209 | 210 | 211 | 212 | 213 | 214 | 215 | 216 | 217 | 218 | 219 | 220 | 221 | 222 | 223 | 224 | 225 | 226 | 227 | 228 | 229 | 230 | 231 | 232 | 233 | 234 | 235 | 236 | 237 | 238 | 239 | 240 | 241 | 242 | 243 | 244 | 245 | 246 | 247 | 248 | 249 | 250 | 251 | 252 | 253 | 254 | 255 | 256 | 257 | 258 | 259 | 260 | 261 | 262 | 263 | 264 | 265 | 266 | 267 | 268 | 269 | 270 | 271 | 272 | 273 | 274 | 275 | 276 | 277 | 278 | 279 | 280 | 281 | 282 | 283 | 284 | 285 | 286 | 287 | 288 | 289 | 290 | 291 | 292 | 293 | 294 | 295 | 296 | 297 | 298 | 299 | 300 | 301 | 302 | 303 | 304 | 305 | 306 | 307 | 308 | 309 | 310 | 311 | 312 | 313 | 314 | 315 | 316 | 317 | 318 | 319 | 320 | 321 | 322 | 323 | 324 | 325 | 326 | 327 | 328 | 329 | 330 | 331 | 332 | 333 | 334 | 335 | 336 | 337 | 338 | 339 | 340 | 341 | 342 | 343 | 344 | 345 | 346 | 347 | 348 | 349 | 350 | 351 | 352 | 353 | 354 | 355 | 356 | 357 | 358 | 359 | 360 | 361 | 362 | 363 | 364 | 365 | 366 | 367 | 368 | 369 | 370 | 371 | 372 | 373 | 374 | 375 | 376 | 377 | 378 | 379 | 380 | 381 | 382 | 383 | 384 | 385 | 386 | 387 | 388 | 389 | 390 | 391 | 392 | 393 | 394 | 395 | 396 | 397 | 398 | 399 | 400 | 401 | 402 | 403 | 404 | 405 | 406 | 407 | 408 | 409 | 410 | 411 | 412 | 413 | 414 | 415 | 416 | 417 | 418 | 419 | 420 | 421 | 422 | 423 | 424 | 425 | 426 | 427 | 428 | 429 | 430 | 431 | 432 | 433 | 434 | 435 | 436 | 437 | 438 | 439 | 440 | 441 | 442 | 443 | 444 | 445 | 446 | 447 | 448 | 449 | 450 | 451 | 452 | 453 | 454 | 455 | 456 | 457 | 458 | 459 | 460 | 461 | 462 | 463 | 464 | 465 | 466 | 467 | 468 | 469 | 470 | 471 | 472 | 473 | 474 | 475 | 476 | 477 | 478 | 479 | 480 | 481 | 482 | 483 | 484 | 485 | 486 | 487 | 488 | 489 | 490 | 491 | 492 | 493 | 494 | 495 | 496 | 497 | 498 | 499 | 500 | 501 | 502 | 503 | 504 | 505 | 506 | 507 | 508 | 509 | 510 | 511 | 512 | 513 | 514 | 515 | 516 | 517 | 518 | 519 | 520 | 521 | 522 | 523 | 524 | 525 | 526 | 527 | 528 | 529 | 530 | 531 | 532 | 533 | 534 | 535 | 536 | 537 | 538 | 539 | 540 | 541 | 542 | 543 | 544 | 545 | 546 | 547 | 548 | 549 | 550 | 551 | 552 | 553 | 554 | 555 | 556 | 557 | 558 | 559 | 560 | 561 | 562 | 563 | 564 | 565 | 566 | 567 | 568 | 569 | 570 | 571 | 572 | 573 | 574 | 575 | 576 | 577 | 578 | 579 | 580 | 581 | 582 | 583 | 584 | 585 | 586 | 587 | 588 | 589 | 590 | 591 | 592 | 593 | 594 | 595 | 596 | 597 | 598 | 599 | 600 | 601 | 602 | 603 | 604 | 605 | 606 | 607 | 608 | 609 | 610 | 611 | 612 | 613 | 614 | 615 | 616 | 617 | 618 | 619 | 620 | 621 | 622 | 623 | 624 | 625 | 626 | 627 | 628 | 629 | 630 | 631 | 632 | 633 | 634 | 635 | 636 | 637 | 638 | 639 | 640 | 641 | 642 | 643 | 644 | 645 | 646 | 647 | 648 | 649 | 650 | 651 | 652 | 653 | 654 | 655 | 656 | 657 | 658 | 659 | 660 | 661 | 662 | 663 | 664 | 665 | 666 | 667 | 668 | 669 | 670 | 671 | 672 | 673 | 674 | 675 | 676 | 677 | 678 | 679 | 680 | 681 | 682 | 683 | 684 | 685 | 686 | 687 | 688 | 689 | 690 | 691 | 692 | 693 | 694 | 695 | 696 | 697 | 698 | 699 | 700 | 701 | 702 | 703 | 704 | 705 | 706 | 707 | 708 | 709 | 710 | 711 | 712 | 713 | 714 | 715 | 716 | 717 | 718 | 719 | 720 | 721 | 722 | 723 | 724 | 725 | 726 | 727 | 728 | 729 | 730 | 731 | 732 | 733 | 734 | 735 | 736 | 737 | 738 | 739 | 740 | 741 | 742 | 743 | 744 | 745 | 746 | 747 | 748 | 749 | 750 | 751 | 752 | 753 | 754 | 755 | 756 | 757 | 758 | 759 | 760 | 761 | 762 | 763 | 764 | 765 | 766 | 767 | 768 | 769 | 770 | 771 | 772 | 773 | 774 | 775 | 776 | 777 | 778 | 779 | 780 | 781 | 782 | 783 | 784 | 785 | 786 | 787 | 788 | 789 | 790 | 791 | 792 | 793 | 794 | 795 | 796 | 797 | 798 | 799 | 800 | 801 | 802 | 803 | 804 | 805 | 806 | 807 | 808 | 809 | 810 | 811 | 812 | 813 | 814 | 815 | 816 | 817 | 818 | 819 | 820 | 821 | 822 | 823 | 824 | 825 | 826 | 827 | 828 | 829 | 830 | 831 | 832 | 833 | 834 | 835 | 836 | 837 | 838 | 839 | 840 | 841 | 842 | 843 | 844 | 845 | 846 | 847 | 848 | 849 | 850 | 851 | 852 | 853 | 854 | 855 | 856 | 857 | 858 | 859 | 860 | 861 | 862 | 863 | 864 | 865 | 866 | 867 | 868 | 869 | 870 | 871 | 872 | 873 | 874 | 875 | 876 | 877 | 878 | 879 | 880 | 881 | 882 | 883 | 884 | 885 | 886 | 887 | 888 | 889 | 890 | 891 | 892 | 893 | 894 | 895 | 896 | 897 | 898 | 899 | 900 | 901 | 902 | 903 | 904 | 905 | 906 | 907 | 908 | 909 | 910 | 911 | 912 | 913 | 914 | 915 | 916 | 917 | 918 | 919 | 920 | 921 | 922 | 923 | 924 | 925 | 926 | 927 | 928 | 929 | 930 | 931 | 932 | 933 | 934 | 935 | 936 | 937 | 938 | 939 | 940 | 941 | 942 | 943 | 944 | 945 | 946 | 947 | 948 | 949 | 950 | 951 | 952 | 953 | 954 | 955 | 956 | 957 | 958 | 959 | 960 | 961 | 962 | 963 | 964 | 965 | 966 | 967 | 968 | 969 | 970 | 971 | 972 | 973 | 974 | 975 | 976 | 977 | 978 | 979 | 980 | 981 | 982 | 983 | 984 | 985 | 986 | 987 | 988 | 989 | 990 | 991 | 992 | 993 | 994 | 995 | 996 | 997 | 998 | 999 | 1000

- ②⑥ F. Lane, "The enlargement.", p. 238.
- ②⑦ cf. J. J. Norwich, *op. cit.*, pp. 214-223.
- F. Lane, *Venice*, pp. 114-117.
- ②⑧ ハイモンテ・ティエポロは、マルコ・クイリーニと結んで、ドージェのグラデニゴの政策に反対し、平民や外国人の貴族への参加は、貴族の権利を危くすると考えていた。グラデニゴ家とティエポロ家との不和が背景にあった上、フェラ戦争、教皇による破門をも考えられる。ウエネツィア史は、一般に、ゲルンとギベリンの党争に毒されなかった唯一の都市とされているが、ティエポロの反乱は、ゲルンによってひきおこされた可能性が多い。一三〇九—一一年のフェラ戦争は、国内的に主戦派と反戦派との対立を生み、教皇庁は反戦派とむすび、ゲルンが介入する余地があった。cf. F. Lane, "The enlargement", p. 240. またこの反乱は、分離派貴族による現在の政府の中のポストを奪取するための反乱でもあった。cf. R. Cessi, *Storia della Repubblica di Venezia*, I, p. 286.
- ②⑨ F. Lane, "The enlargement.", p. 245.
- S. Chojnacki, "In Search of Venetian Patriarche.", p. 51.
- ③⑩ F. Lane, "The enlargement.", p. 243.
- ③⑪ cf. B. Pullan, *Rich and poor in Renaissance Venice*, Oxford, 1971.
- ③⑫ ミラーサは現在のトプロモニクの北。
- ③⑬ F. Lane, "The enlargement.", p. 246.
- ③⑭ G. Villani, *Cronaca*, 2:244.
- ③⑮ トラルカの表現。ウエネツィアは、一三三八年には人口十二万をこえたが、ジェノヴァはいかなる時点でも十万はこえなかった。いずれの都市も四八年の黒死病で大打撃をこうむり、ジェノヴァは一三四年の約六〇%に減少。いっぽうウエネツィアは、一三六三年には往

民六万五千。

③⑯ 政治的にはウエネツィアが常に安定を示したのにならして、ジェノヴァは党派争いに終止して、遂にその自由を売り渡すにいたる。フランコ・サケッティはその『ノウェルレ』七一で、ジェノヴァ人をばらばらにちらばるロボの群れに、またウエネツィア人をびたりとよりそう豚の群にたとえている。

ジェノヴァ人は個人主義へのはつきりした傾向を示し、彼らの船舶は個人において所有されていた。

いっぽうウエネツィアでは、船舶は公共財産であった。したがって、ジェノヴァがウエネツィアにたいして長じていたのは、その獨創性であった。ジェノヴァの金貨は一二五二年に鑄造されたが、ウエネツィアの金貨は一二八四年にあらわれた。最初の海図がジェノヴァに現れたのは一三一一年であるのにならして、ウエネツィア人の海図は一三六七年である。保険契約もジェノヴァでは一三四二年に現れるのにならして、ウエネツィアでは、一三九三年以降である。公共の機械時計も、ジェノヴァで一三五四年に使用されているのに、ウエネツィアでは、はるかにおくれで一三九二年からである。ジェノヴァ人がジブラルタルをこえランドルにいたったのは一二七〇年代であるが、ウエネツィア人はそれに約四〇年のおくれをこえている。

以上から理解されるように、ウエネツィア人は保守性、後進性のそしりはまぬがれない。

- ③⑰ G. Luzzatto, *Storia economica di Venezia dal XI al XVI secolo*, Venezia, 1961, p. 146.
- ③⑱ F. Lane, "The enlargement.", p. 259.
- ③⑲ *ibid.*
- ④⑰ 東ハロポネソス半島一帯の地域。
- ④⑱ F. Lane, "The enlargement.", p. 260.

④ セラータ以前では、貴族の家柄は必ずしも全部が全部大議會に席を占めるとはかぎらなかつた。病氣のためや、外国に赴いたりして議員

にならない実例は多い。

二 貴族階級の確立

前章においては、セラータを単なる階級闘争（それは伝統的見解であつた）として見るのではなく、多くの問題を内包する貴族階級内部の問題であり、それと同時に貴族階級が他の階級を自己の中に入れて包みこむかという運動であつたかを見た。このような見方をするとき、十四世紀のヴェネツィア貴族は、排他的、独占的ではなくて、柔軟で包擁的であつたことがわかるであらう。

ヴェネツィア貴族についてはひとつの神話が定着していた。それは、貴族階級はひとつの目的や理念にたいしては統一の歩調をとる均質の共同体であり、その内部には平等の原則が支配していたといふのである。しかもセラータがいったん完成すると、前述のようにキオッジャ戦争のときを例外として、長い間にわたつて、その階級への新加入をみとめない排他性と独占性を一貫して保持していたと考えられることである。

しかしヴェネツィア貴族階級は、一致して高邁な理想を追究して国家に奉仕した均質的な団体ではなく、さまざまの利害關係をかかえた雑多なグループの集団であつた。むしろ対立する利害をもつた党派に分裂していたのである。

そのひとつは経済的利益の対立である。かつてチッシン・コッヂ^①はヴェネツィア政府の財政措置を、貴族グループのひとつの利益集団の優越の表現とみなしたのであつた。レヴァンテ貿易から独占的利益をひき出した有力なグループは、財政措置によつて、自己業務の保護にむけて国政を沿わせようとしたのは当然であつた。しかし、さほど裕福でなく、租税負担のみを強いられて貿易の利益を受けとることの少い貴族のグループにとっては、抵抗しかありえなかつたであらう。このことは前章であげたようにクラッコの分析するところであつた。じじつ前述の一三二四年の航海条令は輸入を制限す

ることによって、特定の貴族グループが利益を独占しようとしたところみであった。あるいはジェノヴァ戦にたいする態度も大いにちがっていた。それは一三五〇年代の討論の中で如実にみられるものである。

さらに、今ひとつの見方がある。年代記作者トメニコ・マリッヒーロ Domenico Malpiero は「他の多くの場所のように、ヴェネツィアには二つの党派があった」とのべる。その党派とは経済的利益によって分かれるのではなく、家系によっていた。ヴェネツィアの名門には、その起源がきわめて「古い家系」Case Vecchie と、比較的「新しい家系」Case Nuove とがあった。古い家系に属するものはダンドロ、グラデニーゴ、コンタリーニ、モロシーニ、コルネル、ジュステニアーニ、クイリーニ、サヌートなどの二四家、新しい家系としては、ドナ、モチェニーゴ、ロレダンなど十六家を数えた。しかし一三五〇—一六〇年代には、これらの家は全貴族の二二%にすぎない。これら二つの有力な家系のグループは合せて約四十家を数えるが、このほかにさまざま有力でない家が数倍にのぼった。すなわち、ある貴族だけが富や政治的影響を独占していた可能性は十分にある。(しかし注目すべきことは、圧迫された貴族が中産階級と同調して、主流の貴族グループと闘うということがなかった。実にこの点が、フィレンツェをはじめとする他の中世都市と類を異にするところである。)

ヴェネツィア貴族の中に分裂があったのは以上のべたところであるが、貴族に新しく参加させるばあいの条件も決して一定不変ではなかった。はじめは四十人会 Quaranta のうち十二票を獲ればよかったのが、次第にきびしくなり四十人の三分の二をとることが要求されるようになった。^⑥申請しながら承認をえられなかった者には三〇〇リラの罰金が課せられた。このことは、やみくもに貴族になりたがる連中のうごきを阻止しようとするものであった。^⑦以上から、一二九七年のセラータで貴族身分が完全に確定されたのではなく、貴族の身分が何であるかをたえず模索していたことがわかる。その努力は十四世紀を通じておこなわれたのであって、ヴェネツィア貴族は流動的であった。

じじつセラータにつづく八十年間に、新人が入ってくると同時に、旧くからある家系が断絶することが少くなかった。

チヨイナツキ Stanley Chojnacki によれば、貴族身分とほぼ認定される二四四家のうち、三二%が一三三九年前に断絶するか、一三〇〇年以降にはじめて登場している。逆にいえば、一二九〇年代から一三七九年まで存続した家は一六六家(六八%)である。^⑧

さて二四四家から一六六家をさしひいた七八家はどこから来たのであろうか。そのうち四一家は、たまたま一二九三—九七七年に議会に議席を占めていなかったが、それ以前には議席を有していた家である。(たとえば Fosali, Colsi, Zulian, Emo などの諸家) したがって七八家からこれら四一家をひいた三七家がどこから来たかということになる。その中には、以前から貴族ととりひきのあった七軒、アッコン陥落後ヴェネツィアに定住した二軒、ティエポロの陰謀を鎮圧するのに功績のあった十四家などが挙げられる。^⑨ (このような論功行賞は七十年後、キオッジア戦争後、再びとりあげられた。このばあいは、戦争で生じた貴族の減少を埋めあわせる意味をもっていたことが考えられよう。) セラータといい、一三八一年のばあいといい、平民の加入は、実はジェノヴァとの戦争を背景としていることは注目すべきである。

いっぽう消滅する貴族の家系については、以下のことが推測できる。男系の後嗣がないときに消滅するのであるから、消滅する家というのには必ず小さい家系であると断定できる。

いっぽう、一三七九年に存在した一八七家に一三八一年に貴族に叙せられた三十家を加えると二一七家となり、これは一二九〇年代の数字と一致する。^⑩ このことは、消滅した家系と同一数の家を一三八一年に追加しようとする意志が働いていたことが推定できるであろう。一三八一年の新貴族の加入は、例外として考えるべきではなく、——一般にそのように受けいれられている——、むしろ、十三世紀末から十四世紀初頭にかけておこなわれたセラータの継続であった。一三八一年の三十家の新加入は、七〇年前にティエポロの陰謀の後十四家が貴族に昇格を許されたのと同じ原則なのである。

以上から見てわかるように、セラータは実に長い経過をもっている。それは十四世紀という長い過程の中で完成へと導かれたのであった。

しかもその間のヴェネツィアの貴族階級は均質的ではなく、約四十軒の寡頭政治的な有力な家を核に、多数の中小の貴族の家が存在していたことはすでにのべたところである。彼らはそれぞれ自己の利益を主張したのであって、貴族間の平等や均質性は神話といわなければならぬであろう。一例をあげると、一三七九年にジェノヴァの脅威を撃退するために政府がおこなった各家の財産評価の中には、五九人のモロシーニ姓を名乗るもの、五六人のコンタリーニ姓を名乗るものから、たった一名しか名前の見当らない家まで、これらに見られるように家のサイズは実に大小さまざまである。⑩そればかりかコルネル家の各メンバーの収入を例にとっても、低い者は五〇〇ドゥカート、高いところは六万ドゥカートとばらまかれている。⑪しかもいっぽうでは、消滅する家、新加入をみとめられた家など、その消長は複雑であった。

しかし、ここに注目すべき現象が現われてくる。一四〇三年に、四十人会が二名の四十人会の長 *Capi di Quarantia* の名において、すなわち *ピエトロ・アリモンド* *Pietro Arimondo* と *ピエトロ・ミアニ* *Pietro Miani* が、大議會にたいて、貴族の家系のひとつが断絶したときに、ヴェネツィア生れの平民の有力家族をそれを埋めるものとして貴族に加えることを提案したのであった。⑫このことのもつ意義はきわめて大きい。というのは、セラータ後の貴族に対する考え方を見事に投影しているからである。すなわち、第一に貴族の家柄の総数を増やさないかわりに、減らしもさせないという意向が働いていること、第二に平民に（とくに経済的に有力な平民に）貴族への新加入の門をわずかでも開けておいて、平民の不満をそらすばかりか、平民が積極的に國家に協力することを期待していることである。すなわち、一四〇三年まで、セラータは一方的な貴族による平民の排除ではなく、その包擁作用を伴っていたということ、同時に貴族の家系の減少をおそれるといふ傾向をもちつづけていたということである。

しかし、この四十人会の二人の長による提案はドージェの委員会において否決されてしまった。この提案が拒否されたという時点において、ヴェネツィア貴族階級の性格の決定的な変化がみとめられるのである。したがって伝統的に理解されてきた、一二九七年のセラータを貴族階級による平民の排除としてとらえるという理解は、実にこの時点において実現

することになるのである。したがって人民集会が一四二四年に閉鎖されたという事実が関連をもつようになる。

一四〇三年以前では、ヴェネツィア貴族階級は平民を吸収する原則を継続的にもっていた。ところがこれいご二百年以上にわたり、ヴェネツィア貴族階級は閉されたカーストとなる。逆にいえば、十五世紀にはいってヴェネツィア貴族階級が確立したということができよう。十五世紀、十六世紀のヴェネツィアが、純粹の貴族階級支配の時代となるのである。

① R. Cessi, *Politica ed economia di Venezia*, pp. 23-61.

R. Cessi, *Storia della Repubblica*, I, p. 286.

② G. Gracco, *Società e stato*, pp. 337-350; pp. 373-384.

③ S. Chojnacki, *op. cit.*, p. 50.

B. Z. Keder, *op. cit.*, p. 48.

④ *cf.*, S. Chojnacki, *op. cit.*, p. 49.

⑤ O. Logan, *op. cit.*, p. 2; 32.

S. Chojnacki, *op. cit.*, pp. 49-50.

D. S. Chambers, *The Imperial Age of Venice*, London, 1970, p.

81. ヲシニの党派はくくニエニ選出つて争つたらしい。コ

ト奇妙なコトだ。一三八二年から一六二〇年にいたるまで「旧

家系」からはエニは選出されてつた。

⑥ S. Chojnacki, *op. cit.*, p. 53.

⑦ *ibid.*, pp. 53-54.

⑧ *ibid.*, pp. 54-56.

⑨ *ibid.*, pp. 56-57.

⑩ *ibid.*, p. 55.

⑪ *ibid.*, p. 59.

⑫ *ibid.*, *ibid.*, p. 60.

⑬ *ibid.*, p. 53.

J. C. Davis, *op. cit.*, pp. 18-19.

Marin Sanuto, *Le vite dei dogi*, R. I. S. 2, xxii pt. 4, 42.

三 意識の変化と貴族階級の確立

一三八一年の貴族階級への平民加入は例外ではなくて、一二九七年の継続であった。セラータの完成はすでにこのべたように一四〇三年における平民加入の原則の提案の拒否の中に見られる。では、なぜ一四〇三年になって、貴族は平民加入の原則を捨てて、貴族階級の排他性を確立したのであろうか。

逆にいうと、中産階級に門戸をいくらかでも開いておいたことの意味は、第一に貴族階級自体の柔軟性、包擁性のあらわれである。それは、たとえ中産階級の新加入があっても、新しい要素に影響されることなく、自己の中に包みこんでし

まえるという自己の階級への自信であった。第二には、狡猾といつてよいような、中産階級がより下層の階級と結んで貴族階級と対抗することのないような懐柔策と、必要なときには、——とくにジェノヴァとの戦争の際に——、経済的のみならずあらゆる分野で中産階級からの助力を期待しようとする下心があったといえるであろう。しかしこの第二の配慮は、ひとつの実験によって克服できる見通しがついたのであった。ジェノヴァとの死闘は一三七九年に頂点に達した。ヴェネツィア近郊のキオツジャがジェノヴァ軍に占領されたヴェネツィアは、全面降伏をえらばなければならぬ瀬戸際においてこまれるという未曾有の危機におちいりながら、よくこれに耐えて勝利を手にすることができたのである。①こうしてそれ以後数十年後にジェノヴァの勢力を排除して東地中海の覇権を完成することによって、ヴェネツィア共和国は自己への自信を深めた。しかも、この苦しい戦争を通して、貴族階級は中産階級の献身をえたばかりか（その見かえりとして新しく貴族にむかえた）、彼らがいちばんおそれていた下層民の離反も体験せず、いよいよ経済的にも政治的にも独力で処理できるといふ見通しを十五世紀はじめにもつようになったのであった。②

このように一二九七年のセラータの開始といい、一四〇三年のセラータの完成（こう呼んでよいであろう）といい、ともにジェノヴァとの熾烈な戦争が背景にあったことは忘れることはできない。実にヴェネツィア貴族階級の確立は、ジェノヴァの存在を無視して語ることはできないのである。

しかし、ヴェネツィア貴族階級の確立にとって、上記の外的な誘因よりも、中産階級を包みこむ包擁性を失って、守勢に立って自己の階級の中に閉じこもろうとする収縮性が一四〇三年の決定をまねくにいたったいきさつの方がより重要なのではないだろうか。ことを変えていふならば、一二九七年から一四〇三年にいたる間に、貴族階級の意識の中において、包擁性や柔軟性を去って独善性と排他性にいたる何らかの内的な動きがあったのではないだろうか。これこそ重要なのである。本章においては十四世紀のヴェネツィア貴族一般の意識の変化をたどることになるであろう。

さて、十三世紀までを商人の英雄時代、商人の雄飛と不屈の企業精神の時代としてとらえ、十四世紀以降を経済の沈滞

の時代と考える傾向は、ほぼ定着してきたように思われる。もちろん、前者から後者への移行の時期を明確に指摘することは不可能であるが、全体的にいつて、経済情勢、商人の活動、商人の意識の上に大きなへだたりが見られることは事実であろう。

おそらく十三世紀の終りから十四世紀のはじめにかけて、ヨーロッパの遠距離通商はその絶頂に達したことであろう。しかし、その頂点から不振の時代へと下降していくことの誘因は、いうまでもなく二つの根拠にしばられるであろう。

第一には中国大陸、中央アジア、近東に広くひろがっていた蒙古帝国の瓦解である。ヨーロッパは、これによって黒海以東のアジア諸国家との接触を失うことになる。一三四〇年以降、ヨーロッパは、アジアからの商品の輸入を、総じてシリア人やエジプト人などのイスラム教徒の仲介者の手を経てしなければならなくなったのである。そればかりでなく、ヨーロッパ人がアジアに足をふみ入れることは不可能になったのである。^③

第二にはいうまでもなく黒死病の問題である。一三四七年末から一三五〇年にわたる大流行病は、おそらくヨーロッパの人口の三分の一を奪い去ったにちがいない。そればかりでなく、以後周期的に襲来する各種の流行病は、人口激減に回復の機会を与えなかった。このことはとりもなおさず、ヨーロッパ市場の縮少を意味するものにほかならなかった。約十二万人の人口を誇ったヴェネツィアも、一三六三年ころには六万五千人を数えるのみであった。^④以上のべてきた異常な二つの現象が、ヴェネツィアに否定的に作用したであろうことは現像にかたくない。^⑤

第一章ですでのべたように、当時のヴェネツィアにとって二種類の異った通商圏が存在した。すなわちヴェネツィアの通商活動がますます日常化する地中海における中核地帯と、冒険をとまなうそれよりも外側の辺境地帯であった。（後者での通商にはコレガンツァとよばれる協同経営形態が採用されたことはすでにのべたところである。）しかし上述のアジアとヨーロッパとの交易の遮断は、ヴェネツィア商人から危険ではあるが利益の莫大な通商地帯を奪い、冒険商業の範囲は急激にせばめられ、それに反比例して地中海周辺の通商は日常化し商人の定住化がすすむことになる。したがってコ

レガンツァは無用化した。地中海周辺の通商が日常化し、貿易量が増大すれば、たとえ利潤率においてコレガンツァに及ばないとはいえ、アジア通商の喪失を補って余りあるものとなったであろう。^⑥

ところが地中海周辺が残された唯一の活動範囲となったときに、黒海沿岸の植民地は不安定な状態にさらされたばかりか、エーゲ海やバルカンへのオスマン・トルコの進出がはじまり、さらにヴェネツィアにとっての後背地であるヨーロッパが、英佛間の百年戦争、ドイツの混乱、北イタリアにおける紛争、南イタリアにおけるアンジュー家とアラゴン家との争いなどによって不安定な状況におちいついていった。

しかもアジアとヨーロッパをつなぐイスラム教徒は、十字軍の報復として不寛容の度を深めていく。一三五三年、アッコで宗教儀式を催したヨーロッパ商人は、式後ただちに逮捕された。^⑦イスラム教圏内では、安全通行証なしにイスラムの地域に来るヨーロッパの商人が殺害されるのは合法的であると考えられた。のみならず、今や公海も危険性をました。海賊の横行がこれである。

この困難な時期にあたって、ヴェネツィアの海外通商への投資家における貴族の比率は八一%に達していた。例えば、一三六〇～六二年におけるキプロスのフマグスタに定着していた二六人のヴェネツィア人のうち二二人が貴族であった。^⑧

このような状況の中にあつて、ヴェネツィア国内においてひとつの経済上の変化が見られる。一四世紀はじめのヴェネツィア人の商業手引書の中の計算問題は、一〇、一五、二〇、二五%の利益を仮定していた。^⑨じつ一三三八年のジョヴァンニ・ロレダンのデリーへの冒険旅行のコレガンツァの利益は、年二四・五%にあたるとケダーは推定した。^⑩一二六八年、ドージェのラニエーリ・ゼーノ Ranieri Zeno がその財産を修道院に遺贈したときの条件は、コレガンツァ冒険事業に投資すべしということであった。^⑪ところが一三五四年には、ドージェのアントレーア・ダンドロ Andrea Dandolo は、自分の死後、財産は売却してコレガンツァではなく債権などに投資すべきことを遺言している。^⑫これらは一例にすぎないが、十三世紀には冒険事業に投資されていたものが、十四世紀がすすむにつれて政府債券か個人貸付に投資されることが

目立つようになった。一三六〇年、ヴェネツィア国家では海上貿易に投資すべき金が、なすこともなく眠っていきたくない消費生活に浪費されたため、国家は衰えていくのだという歎きの声がかきこえてくる。その四年後にペトラルカは「黄金をあれど、名誉にたいする渴望を（ヴェネツィア人は）示している」と書いたのであった^④。

しかし、私がここでいおうとしているのは、冒險的英雄的商人の世界から暖衣飽食の金利生活者の世界へと、ヴェネツィアが移行しつつあったということではない。これを強調するのは時期尚早であり、誤りでさえある。というのも十四世紀は依然として商人の世界であったからである。

貴族の子弟は少年時代の勉学が終ると、はるかな地域に航海するのが常であった。その地で彼らは商業活動によって自分の家の財産をふやし、同時に外国の習慣、法律、言語の専門家となった。そして一定の時期がすぎると本国に帰り、政治や商業に専心するのがふつうであった^⑤。このようなキャリアをたどらなかつた貴族をさがすことはむずかしいであろう。ドージェみづから冒險事業に参加した。一三四二年、ドージェが商業をおこなうことを禁じた法令もほとんど守られていなかったのである^⑥。ヴェネツィアにおいては、貴族は役職の選挙にさきだつて、商業のために海外に出張する計画があることをのべれば、公職を免除されていた^⑦。

このように十四世紀ヴェネツィアの商業世界における外面上の変化は、さして目ざましいものとはいえない。政府債権への投資も早い時代からはじまっていたのである。問題は当時の人びとの意識の変化であろう。

当時のヴェネツィア人の手になったものを総合すると、華かな満足感から漠然とした不満や不安への移行がみとめられる。ニコラ・ボン Nicola Bon と呼ばれる不詳の人物は、一三二八年にその友人に、全イタリアにおいてヴェネツィアのような都市はない、ヴェネツィアはよいことから、よりよいことへと、今から永遠に進歩するにちがいないとのべた^⑧。そこには楽天的感情がみなぎっている。

ところがこのような感情は永続しなかつたらしい。一三六〇〜八二年の間に書いた年代記作者は、ヴェネツィアは多

くの不幸を身に受けて、自分の時代に衰退を体験したと書いた。^⑩ また一三六八年ころ、ペトラルカは、四十年ほど前ではヴェネツィアはもっと繁栄していたと述べている。『ヴェネツィア年代記』 Cronica Venetiarum の作者やその他の人は、ヴェネツィアの現情に不満をのべ批判を残すようになった。

ヴェネツィアをめぐる不幸は公然とのべられるようになった。「このみじめな世において、苦難は多く、絶えることがないほどなので……」というのが一三八四年のあるヴェネツィア人の遺言書の書き出しなのである。あるいは「今のこの世の中はいかなるよいこともない。……」とルッカから来た人物はくりかえし、さらにはルッジエロ・コンタリーニ Ruggero Contarini もまた、「人間が一時間たりとも快楽の時を楽しむことのない、この悲惨で不幸な世の中」と歎いている。^⑪ 今や憂うつ Malinonia は人びとの心に重くのしかかっていた。死への恐れ、神の裁きへの恐れが通常のこととなったのはよく説かれるところである。パラッツォ・ドゥカーレの外側柱廊の柱頭に彫られた十四世紀末の作者不明の一連の場面は、突然の死をあらわしたものである。^⑫ これらが最も人通りの多い（とくに貴族の）場所にかかげられた意味をかみしめる必要がある。

このような無力感があらわれたことの原因は、明らかに黒死病、それも連続して襲ってくる疫病の影響であると考えてさしつかえない。それは突然の死をもたらしものであったからである。しかし、この世の中を苦しみの世界と感じることは、何もこの時代に限られたことではない。それは歴史を貫くテーマであるにちがいない。しかしここで問題になるのは、このようなヴェネツィア人の意識をもたらした心理的屈折作用そのものなのである。

十四世紀はじめのヴェネツィアでは、逆境におちいることは、罪を犯したためであると素朴に理解されていた。（この考え方は、十六世紀にあっても現れている。）^⑬ それはキリスト教の伝統的思考である。ところが十四世紀も終りに近くなると、この伝統的な思考は見られず、逆境のよってきたところは『運命の女神』^⑭ Fortuna に帰するようになった。ヴェネツィア人が一三七九年に体験した未曾有の国難は、神のなせる業ではなくフォルトゥーナの仕業であると見なされた。

年代記作者 Caresini は、ヴェネツィアの成功を聖なる神の御業に帰する一方、その敗北をフォルトゥーナのきまぐれのせいにした。^② こうしてフォルトゥーナは、今や、危険で歓迎されないものとなった。以前にはフォルトゥーナは、良い方にも悪い方にも傾くものであると考えられていた。それが今や悪い方にのみ傾くものであり、人間の道徳の及ばないもの、避けるべきものと考えられるようになったのである。

フォルトゥーナとならんで危険 *risicum*, *risico* と同じことはアラビア語 *rizq* から来たものらしい。^③ しかし十三世紀末には、それは良い意味に理解されていた。「良きリスクをもつ *aver risego bon*」というように、何か良い結果を引き出すように思いきつてある事を行うということを意味した。あるいは「フォルトゥーナとリスクをもって *ad risicum et fortunam* 事を運ぶ」というようにつかわれていた。それは危険 *periculum*, *pericolo* とは明確に区別されていたようである。一例をあげれば戦争に加って自分を危険にさらす *ad risicum* ということが *risico* なのであり、その結果として *periculum* が迫り来るのであって、両者は同一ではなかった。ところが十四世紀の中ごろになると、*risicum* と *periculum* とは区別されることなく、漠然と混同して使用されるようになってきた。このことは二つの単語の概念が不明確になったにちがいないとケダーは解釈する。^④ つまり約一世紀の間に、*risicum* の概念に変化がおこったのである。それは肯定的な意味から否定的な意味への移行である。*risico* と *pericolo* との距離はせばまって、終には重なるようになる。それは何か事をおこせば(成功の見込みは少なくても)、たちどころに危険が迫るということを意味する。このような用語の使用法の背後に何が横たわるのであろうか。

よくよく成功の見込のないことには、手を出すな、決定的な勝利を望んで深追いつて失敗をくらうくらいなら、ほどほどの勝利で満足せよ、自己の安全を第一とせよ、という考え方である。

今や *risico* とは、何も失うものもないか、あるいはあっても少いような絶望的情况の下で、あえて賭けるべきものとなった。キオッジア戦争中の一三七九年末、ヴェネツィアには食糧の貯えはなく、住民はぞくぞく脱出する絶望的情况で

あった。ヴェネツィアが援軍をまついとまもなくジェノヴァの包囲軍に攻撃をしかけたのは、何も失うべきもののない絶望的情況の中においてであった。リスクを冒すのは、他にいかなる選択の余地が残されていない時のみであった。十四世紀後半になって、フォルトゥーナとリジコは、今や予測できない、制御できない、人間に対して敵意をもつものと考えられるようになった。したがって、できうれば、それらは避けるべき存在である。用意周到さと要心ぶかさのみが人間にとって頼みとなるもので、それらこそ新しい道徳律となった。今や確実性のみが時代の指導原理であった。

したがって文書の中で人名に冠する定型のよび方として、「慎重な人」*circumspectus vir* ということが用いられるようになった。あるいは同じく「用心深さ」*prudens* という表現が随所に見られるようになった。慎重さと用心ぶかさは、フォルトゥーナとリジコの前の力弱い人間にとって唯一の防波堤となるのである。これらはもちろん美德であることには相違ないが、果敢なヴェネツィア貴族のもっていた積極性を抑圧するものにほかならなかった。つまり慎重さや要心深さとは、消極性であり危険回避の思想なのであった。

しかしここで注意しておかなければならないことは、十三世紀の人間はすべて積極的で楽天的で、十四世紀後半の人間はすべて慎重で消極的かつ悲観的であると割り切ってしまったはならぬことである。それではあまりにも図式的であり、精神の問題を考えるのにふさわしくない。相対的にそういうことがいえるというのであって、ひとつの傾向として留意しておけばよいのである。慎重さと用心深かさにかかわる危険回避の傾向にしても、同じことがいえるのであって、そういう傾向が強まったということを認識するだけで十分である。危険をさけ安全を求めるのは人間の本能であって、いつの時代においても当然ありうることであるからである。

さて、ケダーは興味ぶかい研究を示した。彼は、一三三九年に死去したドージェのフランチェスコ・ダンドロ Francesco Dandolo の墓のためのパオロ・ヴェネツィアーノ Paolo Veneziano の絵画と、一三八二年に死んだドージェのミケーレ・キロシーニ Michele Morosini の葬儀を装飾したモザイクとの間に注目すべきコントラストを発見した。両方とも、

ひざまづいているドージェとドージェ夫人をキリストに紹介している二人の聖人を画いたものである。しかし描写の仕方が全くことなる。前者においてダンドロ夫妻は威厳をそなえ、聖母やキリストと同じような大きさと同じような態度で画かれている。人間と神との距離は無視されている。ところがモザイク画の方は、最後の審判を連想させるきびしさを感じさせる。モロシーニ夫妻は、キリストの前でも卑小で、かつへだたっており、おびえた存在なのである。こうして十四世紀後半にあっては、人間の尊厳の表現よりも、神への服従、聖人への依存の感情が表面にでてくることになるのである。それは人間への確信が崩壊し、積極的な行動に出ることをひかえて用心に用心を重ねる当時のヴェネツィア人の感情と表裏一体をなすものであった。

人間の自信の喪失と、超自然への依存が増大していくことは、その時代のヴェネツィアの各年代記の中に投影するところでもあった。十三世紀のマルティン・ダ・カナルの年代記は積極的で命知らずの人間の行動にみちている。^⑤ ケダーも指摘するように、勝利は神のたまものかもしれないが、戦争は人間だけが闘うのである。したがってこの年代記の中には奇蹟についてはほとんど語られない。例外はわずかにサン・マルコの遺骨に関してである。それはかすんだはるか過去の時代のことである。彼の同時代には奇蹟がおこったことはのべていない。一三三九年に書かれたピアチェンティーノ Jacopo Piacentino のヴェネツィア＝スカラ戦争 *Bellum Veneto-Scaligerum* にふれられている奇蹟は、冬にもかかわらず春のような気候に恵まれて有利に戦争をはこんだ、これぞ神の加護であるとする。しかしその他の年代記ではこの戦争についていかなる奇蹟ものも書いていない。一三六〇年ころの『ヴェネツィア年代記』*Cronica Venetarum* も、一三二〇年のティエポロの陰謀のとき、奇蹟の雨のために反乱が鎮圧されたとのべる。^⑥ 以上簡単にふれたことの中で、奇蹟はすべて天候に關してのべられたものである。天候による奇蹟は、これを奇蹟とみなしてよいであろうか。それは体験した人の主観によるからである。また一般の奇蹟が画かれているとしても、それは筆者の同時代におこったことではなく、昔からの伝承にすぎない。

ところが、キオツジァ戦争時代のヴェネツィアの書記官長ラッフィーノ・カレンシーニ Raffino Caremini^⑤ (戦後彼は貴族に加えられた)の年代記には、戦争中におこった奇蹟が書かれる。それはジェノヴァ人が敗走することになる炬火の合図を命じたヴェネツィア軍の伝令は、後になって存在しなかったことがわかったというのである。^④ この奇蹟は暖い冬や、雨という自然現象ではなく、ひとりの人間が現われて絶大な影響を与えて姿を消すという超自然の純粋な奇蹟なのである。以上のべてきたことから、時代が下るにつれて各年代記の中で奇蹟は徐々に前面に現われてくるのがわかるであろう。人間行為の中に神が介入する程度が強まっていくのである。

一二六〇年、イタリア各地で現れた鞭打教団はヴェネツィアでは根をおろすことはできなかった。強い意志をもったヴェネツィア人の知的風土は、その伝播に適していなかったのである。ところが時代がさがって一三九〇年十一月には、白衣をまとった鞭打行者は、以前にはなかったようなひろい共感をヴェネツィア人の間によびおこしたのであった。^④ これらの諸現象は、近代に近づくにつれて、人間の意識は超自然的なものから離れていくというわれわれの素朴な先入感に強い一撃を与えるものである。

一方、黒死病による人口激減は広汎な人手不足をもたらしたことはいうまでもない。とくにヴェネツィアはジェノヴァとともに奴隷貿易の根拠地であるところから、大量の奴隷(とくに女性)が東方からもたらされたのであった。^④ それはペトラルカの証言するところである。ヴェネツィア貴族の家庭にあって、子弟は奴隷に養育され甘やかされるようになったと考えられる。その結果、十四世紀末と十五世紀当初における指導的人物は、奴隷に養育されるようになった世代に属する。冒険や危険をおかす積極的な感情に欠けるようになったのは、この世代の特徴なのである。そればかりか、一三七九年のおそろしいジェノヴァとの戦争の体験を味わった彼らにとって、戦後の虚脱感と安堵感とは、新しい局面を打解し開拓しようとする意欲を消失させるのに十分であったであろう。

現状に安住し、危険を回避し安全を確保しようとする傾向は保険制度の採用によっても裏づけされるであろう。すでに

のべたように、ヴェネツィアでは一三九三年に採用されているが、このことはこの世代の意識を間接的に証明するものである。

かつては氣宇壮大な事業にのり出していったヴェネツィア人の意識は、たえず限界をつき破ろうとする積極性に裏づけられていた。今や人間の無力を自覚しつつあったヴェネツィア人は、設定された限界内で自己を主張することになった。たとえば十四世紀後半キプロス島のフェデリーゴ・コルナロー Federico Cornaro の砂糖プランテーションは余りにも有名であるが、実は、それは十三世紀にすでに存在していたものであるにすぎない^④。フェデリーゴのおこなったことは十三世紀の作業の再合理化であり改良であって、以前になかったものの創造ではなかったのである。

せばめられた限界の中で人びとが努力するとき、おこりうることは競争の激化であり、弱者の排除であった。移動を好む精神は鈍り、定着性が増す。ルッジェーロ・コンタリーニなる人物は一四〇四年にいつている。「余は大物である。しかして余は海上の旅に出かけることはできない」。『*Son grande e non posso navegar*』と^⑤。

それは当時のヴェネツィア貴族におしなべて見られた気風を表現したものにすぎない。それよりも四十年前、『ヴェネツィア年代記』^⑥は貴族のリストをかかげ、それぞれの貴族の活躍は、各家柄に本来そなわった伝統に由来するものであるとのべた。たとえば、ダンドロ家は分別があり大胆で、ジュステイニア家は慈悲ぶかい。一方、バルベリーニ家とプレセリ家とは落着きがなく世界を駆けまわる愚か者であるとしている。これは冒險的貴族から定住型貴族への移行を示すとともに、限界をつきやぶろうとする個人の活躍がもたらす価値をすでに忘れ去っていることを示すものである。以上のことを背後において考えるなら、当時の貴族階級の意識の中には、家柄はとるに足らぬが偉大な才能をもつ中産階級をすくい上げる余裕は、夢にも存在していなかったことがうかがえよう。

特定の範囲で自己を主張しようとする貴族は、中産階級がその中にいることを好まなくなったのは当然であった。自己確信のなくなった貴族にとっては、中産階級を自己の中にとりいれるどころか、それを排除することによって現状を維持

し、自己の安全を確保しようとする方向に向ったことは当然である。したがってヴェネツィア貴族階級は独善的になつていく。政治と商業の世界の中で貴族の凝縮作用がおこつたのである。

一四〇三年、貴族階級が中産階級の加入を完全に拒否して、それ以後約二百五十年間にわたつてヴェネツィア貴族階級を固定的なものにしたのは、すでにのべてきたような十四世紀ヴェネツィアにおけるメンタリティーの強い収縮とむすびついでることを結論として指摘することができるとであらう。

ヴェネツィア貴族階級の確立は一四〇三年の中産階級の排除の決定による。しかもそれに先立つ数十年の間に、意識面での背景が形成されてつたのである。

- ① J. J. Norwich, *op. cit.*, p. 267-281.
F. Lane, *Venice*, pp. 192-194.
R. Cessi, *op. cit.*, I, pp. 327-330.
② R. Cessi, *op. cit.*, I, pp. 333-340.
③ R. S. Lopez, "The Trade of Medieval Europe: the South", in *Cambridge Economic History of Europe*, ed. Postan & Rich, Cambridge, 1952, 2: pp. 338 ff.
④ D. Herlihy, "The Population of Verona in the First Century of Venetian Rule", in *Renaissance Venice*, pp. 92-93. F. Lane, *Venice*, pp. 18, 462.
⑤ しかしヴェネツィアの通商に有利な影響を与えたところ見方もなりたつ。すなわち、黒死病によるヨーロッパの絶対的な人手不足は、黒海沿岸の奴隷を運搬する奴隷貿易をヴェネツィアにもたらした。また黒死病の生き残りは、一般に生活水準の向上が見られ、とくに東方の高価な消費材への関心が高まったことによつて、ヴェネツィアの貿易を刺激した。
- ⑥ B. Z. Kedar, *op. cit.*, p. 28.
⑦ *ibid.*
⑧ *ibid.*, p. 50.
⑨ *ibid.*, p. 64.
⑩ 上の旅行の生存者は一三三四年八月ヴェネツィアに帰国した。
cf. R. S. Lopez, "Venezia e le grandi linee dell' espansione commerciale nel secolo XIII", in *La civiltà veneziana dal secolo di Marco Polo*, Venezia, 1955, p. 60.
⑪ B. Z. Kedar, *op. cit.*, p. 64.
⑫ G. Luzzatto, *Studi di storia economica veneziana*, p. 66.
⑬ B. Z. Kedar, *op. cit.*, p. 65.
⑭ F. Petrarca, *De rebus senilius*, bk. 4, cf., B. Z. Kedar, *op. cit.*, p. 66. 尤も「トリスカ」の現象をたたくべきである。
⑮ U. Tucci, "The psychology of the venetian merchant in the sixteenth century", in *Renaissance Venice*, p. 349.
⑯ B. Z. Kedar, *op. cit.*, p. 68.

- ① 一二八八年、ガレー船の出発を前にして、事務処理のため公職を免除された実例がある。cf. Tucci, *op. cit.*, p. 350.
- ② B. Z. Kedar, *op. cit.*, p. 82.
- ③ Antonio Carile, *La cronachista veneziana di fronte alla spartizione della Romagna nel 1204*, Firenze, 1969, p. 262.
- Enrico Dandolo の *ドナドネ* 年代記 *Cronica di Venezia* の四一七—四三三行。
- ④ F. Petrarca, *op. cit.*, bk. 10, cf. Kedar, *op. cit.*, p. 82.
- ⑤ Cum zio sia che in questo mondo cativo molte sia le tribulation continue.....cf. B. Z. Kedar, *op. cit.*, p. 83.
- ⑥ *ibid.*, 一三七五年二月三日、三月十七日の註。
- ⑦ *ibid.*, 一三九三年四月十九日の註。
- ⑧ H. Baron, "Franciscan Poverty and Civic Wealth as Factors in the Rise of Humanistic Thought" *Spectium* 13 (1939), p. 12.
- ドナドネの *ドナドネ* 『廿世の秋』 第二章参照。
- ⑨ P. S. Molmenti, *La storia di Venezia nella vita privata*, Trieste, 1978, I, p. 436.
- ⑩ 十六世紀はじめのサンブルー闘争戦争で、ドナドネの「ドナドネ」の流説を神のなせぬものとして考えがひびいた。
- 拙稿『十六世紀ヴェネツィア史における政治意識の覚醒』第二章参照。
- ⑪ B. Z. Kedar, *op. cit.*, p. 85.
- ⑫ *ibid.*, p. 86.
- ⑬ *ibid.*, p. 87.
- ⑭ *ibid.*, p. 88.
- ⑮ *ibid.*, pp. 91-93.
- ⑯ *ibid.*, pp. 105-7.
- ⑰ Martin da Canal, *Les estors de Venise, a cura di A. Limentani*, Firenze, 1972, pp. 16-20, 218.
- ⑱ B. Z. Kedar, *op. cit.*, p. 110.
- ⑲ *ibid.*, p. 112.
- ⑳ S. Romanin, *op. cit.*, III, p. 142.
- ㉑ B. Pullan, *Rich and Poor in Renaissance Venice, The Social Institutions of a Catholic State, to 1620*, Cambridge, 1971, pp. 31-193.
- ㉒ A. Tenenti, "Gli schiavi di Venezia alla fine del Cinquecento", *Rivista storica Italiana* 67: 52-53.
- Petrarca, *op. cit.*, bk. 10, cf. B. Z. Kedar, *op. cit.*, p. 127.
- ㉓ G. Luzzatto, *Storia economica di Venezia*, pp. 225-226.
- ㉔ F. Lane, *Venice*, p. 143.
- ㉕ B. Z. Kedar, *op. cit.*, p. 122.
- ㉖ Anonymous, *Venitianum Historia*, pp. 256, 259, 260, cf. Kedar, *op. cit.*, pp. 122-123.
- (同志社大学教授)

〔付記〕 本論文は昭和五十四年十一月二日史学研究会大会における講演に筆を加えたものである。

The Establishment of the Venetian Nobility as a Ruling Class and Its Background

by

Mitsuaki Nagai

The establishment of the venetian nobility as a ruling class was not made in the *Serrata* ('the Closing of the Great Council') of 1297, but completed through the long process of the fourteenth century. Indeed the *Serrata* was not a triumph of an oligarchy over the people, but in fact a widening of the ruling class in a fashion designed successfully to moderate the strife of factions between commoners and nobles.

In 1403, a proposal was made by the *Capi* of *Luarentia* to add to the Great Council a worthy family of native-born commoners whenever one of the noble families dies out. But this proposal was rejected by the ducal council. The rejection of this proposal symbolizes a definitive change in the nature of the venetian aristocracy.

In this article, I have researched the social and mental background of the establishment of the venetian nobility as a ruling class in the fourteenth century.

The mood of the nobility in the later fourteenth century was a response to the economic depression, and was reinforced by the depression's main effects, from the stiff competition for the shrunken markets to the widespread use of slaves. This mood constitutes, on the psychological level, the exclusive attitude of the venetian nobility.

A Study on the History of *Kumano* 熊野 Copper Mines

by

Atsushi Kobata

It has been known that copper mines existed in the *Kumano* region which includes *Minami-Muro* District 南牟婁郡 of *Mie* Prefecture 三重